

クリスティーナ・ロセッティの詩にみる宗教性

風 間 友 理

Religiousness in Christina Rossetti' s poems

Yuri Kazama

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別 冊

令和 2 年 3 月 31 日 発 行

クリスティーナ・ロセッティの詩にみる宗教性

Religiousness in Christina Rossetti's poems

風間 友理

Yuri Kazama

はじめに

クリスティーナ・ロセッティ(Christina Rossetti, 1830-94)はイギリスの詩人である。父と、母方の祖父がイタリア人移民という家に生まれ、父の病気のため豊かではなかったが、文学や語学の教養が豊かで深い信仰を持っていた母(母方の祖母は保守的なイギリス人であり、宗教は英国国教である)から教育を受け、自然に詩を書くようになった^{注1)}。画家で、「ラファエロ前派」のメンバーとして活躍したダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ(Dante Gabriel Rossetti, 1828-82)は、彼女の兄である。クリスティーナの作品としては、『ゴブリン・マーケット』(*Goblin Market*, 1862)や『王子の旅路』(*Prince's Progress*, 1866)が有名である。また、子供向けの『童謡集／シング・ソング』(*Sing-Song: A Nursery Rhyme Book*, 1872)は、その作品が日本の中学校の英語の教科書に掲載されたりしているので、クリスティーナを児童文学の詩人として認識している方もいらっしゃるかもしれない。

ここでは、彼女の宗教的な詩に注目する。母の影響で彼女も敬虔な英国国教徒であり、その作品のおよそ三分の一が宗教詩に分類されるが、その他にも信仰心の表れた詩は多い。それらを三つの種類に分けて、それぞれの性格やクリスティーナにとっての意味を考えてみたい。

「詩編」の詩

一つめは、純粋な宗教詩、というか、宗教詩の中でも最も宗教色の強いものである。一例として、クリスティーナの晩年に出版された詩集「詩編」(*Verses*, 1893)の中から、「イエスの御名」(“The Name of Jesus.”)の全文を見てみよう。

Jesus, Lord God from all eternity,
 Whom love of us brought down to shame,
 I plead Thy Life with Thee,
 I plead Thy Death, I plead Thy Name.

Jesus, Lord God of every living soul,
Thy Love exceeds its uttered fame,
Thy Will can make us whole,
I plead Thyself, I plead Thy Name.^{注2)} (1-8, vol. II, pp.191-192)

永遠の主、イエスよ、
私たちの愛があなたを恥じ入らせた、
私はあなたの生命をあなたと共に主張する、
あなたの死、あなたの御名を主張する。

あらゆる生き物の主、イエスよ、
あなたの愛は、人が口にする名声を上回り、
あなたの意志は、私たちを健全にする、
私は、あなたをこそ主張し、あなたの御名を主張する。

もう一つ、同じ詩集の中の「神は自らを否定されるはずがない」(“He cannot deny Himself.”)の、
こちらは一部を引用する。

Love still is Love, is Love, if He should say,
“Come,” on that uttermost dread day:
“Come,” unto very me,
“Come, where I be,
Come and see.”

Love still is Love, whatever comes to pass:
O Only Love, make me Thy glass,
Thy pleasure to fulfil
By loving still
Come what will. (11-20, vol. II, p.198)

愛はやはり愛である、愛である、たとえ神が
「来なさい」とあの最も恐ろしい日に言われても。

「来なさい」と、まさに私に、
 「来なさい、私のいる所へ、
 会いに来なさい」と。

愛はやはり愛である、たとえ何が通り過ぎようとも。
 おお、無比の愛よ、私をあなたの鏡にしてください、
 来るものは何でも
 いつも愛して
 あなたの喜びを満たせるように。

この詩集は、キリスト教知識普及協会(Society for the Promotion of Christian Knowledge)という団体から出版された。つまり、読者の教化ということを念頭に書かれたものであるが、しかしその詩は、お説教的な、押しつけがましいものにはなっていない。これらの詩を読んで感じられるのは、純粋な信仰心であり、それが、韻を踏むなど詩としての形式の中に見事に表現されている。この作品は批評家から高く評価されるとともに、一般の読者にも大変な人気で、初版はすぐに売り切れ、クリスマスまでに入手しようと、ある書店では30人もの予約が入ったと伝えられる。いろいろな意味で成功した作品となったわけである。

ところで詩と信仰というのは、クリスティーナにとっては幼い頃から慣れ親しみ、自分の一部となったものであった。その二つを結び付けた形で社会に貢献できる機会を得たことは、それが認められる以前に、彼女にとって大きな喜びであったであろう。また、その二つへ彼女を導いたのが母であり、クリスティーナが母に対して深い愛情を持ち続けていたことを考えると、この詩集が出版された時に母は亡くなっていたとはいえ、これらの作品が書かれた動機に母の存在があったことは想像に難くない。

苦悩と信仰

二つめは、宗教詩であるが、個人的な感情など、他の要素も含むものである。その例として、1846年に書かれた「待っている時間」(“The time of Waiting.”)を見てみよう。長いので、抜粋して引用する。

Life is fleeting, joy is fleeting,
 Coldness follows love and greeting,
 Parting still succeeds to meeting.

If I say, "Rejoice today,"
Sorrow meets me in the way,
I cannot my will obey.

If I say, "My grief shall cease;
Now then I will live in peace:"
My cares instantly increase.

When I look up to the sky,
Thinking to see light on high,
Clouds my searching glance defy.

When I look upon the earth
For the flowers that should have birth,
I find dreariness and dearth.

And the wind sighs on for ever,
Murmurs still the flowing river,
On the graves the sun-beams quiver. (1-18, vol.III, pp.98-99)

人生は過ぎ去り、喜びは消える、
冷淡さが、愛とあいさつの後に来る、
別れが出会いの後に来る。

「今日を楽しめ」と私が言うと、
悲しみが道をふさぎ、
私は自分の意志を通せない。

「悲しみをなくしたら、
穏やかに暮らせるだろう」と私が言うと、
私の心配ごとはすぐにふえる。

私が空を見上げ、
天の光を見ようとすると、
雲が私の視界をさえぎる。

地面を見て
咲く花を探しても、
荒れていて何も見いだせない。

風はたえずため息をつき、
流れる川はつぶやく、
墓の上で太陽の光が震える。

ここには苦しみと悲しみに満ちた「私」が描かれている。天にも地上にも慰めを与えられることはない。しかし、最後には

Thankful for whate'er is given,
Strive we, as ne'er have striven,
For love's sake to be forgiven.

Then, the dark clouds opening,
Ev'n to us the sun shall bring
Gladness; and sweet flowers shall spring.

For Christ's guiding Love always,
For the everlasting Day,
For meek patience, let us pray. (61-69, vol.III, p.100)

与えられるものは何でも感謝しよう、
今までしなかったような努力をしよう、
愛のために、許されるように。

そうすれば、黒い雲が切れ、
私たちにさえ太陽は喜びをもたらし、

美しい花々が咲くだろう。

キリストの導く愛のために、
永遠の日のために、
がまん強い忍耐のために、祈ろう。

と、祈ることに救いを見出している。この詩を書いたのは、クリスティーナが 16 歳のときである。その頃は、父が病気になり仕事を辞めなければならず、一家は経済的に苦しかった。そのため母や姉は仕事に出て、クリスティーナが家で父の面倒を見ていた。彼女自身も健康状態が優れず、まさに苦しみの中にいたのである。この詩はおそらくそのような実生活の状態を反映したものと思われ、16 歳の少女が救いを求めようとする姿には心を打たれる。

同じように信仰に素材をとった詩といっても、先に引用した「詩編」の詩との違いは、ひたすら純粋な信仰を歌うのでなく、こちらにはクリスティーナ自身の悲しみ、苦悩が包み隠さず述べられている点である。「詩編」の詩が教化を目的として書かれたものであったので、その内容は自然であるのに対して、この詩はそのような目的をもって書かれたのではなく、そもそも公表することを想定して書かれたのでもなかった。というのも、17 歳の時、祖父が、家にあった印刷機で孫の詩を印刷し、本を作ってくれたことがあった。そこにこの詩も入っているのだが、これはプライベートなものであり、その後はクリスティーナが生きている間にはこの詩は発表されることはなかったのである。公にするために書かれたものではないだけに、この詩には、クリスティーナの心がそのままの形で表れているように思われる。そして、そのように私的に詩を書くことは、その頃のクリスティーナにとって、ともすれば押しつぶされそうになる自分の心の平安を保つために大切な行為だったのである。

自然な信仰心

最後に、普通は宗教詩には分類されない詩を見てみよう。次の詩は、15 歳の時の「悲しみの中の希望」(“Hope in Grief”)である。

Say not, vain this world's turmoil,
Vain its trouble and its toil,
All its hopes and fears are vain,
Long, unmitigated pain.
What though we should be deceived

By the friend that we love best?
All in this world have been grieved,
Yet many have found rest.
Our present life is as the night,
Our future as the morning light:
Surely the night will pass away,
And surely will uprise the day. (19-30, vol.III, pp.132-133)

言わないでください、この世の混乱が無駄であり、
困難と苦勞が無駄であり、
全ての希望と恐れが無駄であり、
長く和らげられない苦痛であるとは。
私たちが最も愛する友人によって
もしも騙されたとしてもなんだろう？
この世の全てのことが悲しまれてきた。
だが、多くの人々は休息を見出してきた。
私たちの現在の生活は夜のような。
私たちの未来は朝の光のような。
夜はたしかに過ぎ去り、
日はたしかに昇るだろう。

もう一つ、先に引用した「待っている時間」とほぼ同時期の「現在と将来」(“Present and Future”)
においても、

Earthly joys are very fleeting—
Earthly sorrows very long:—
Parting ever follows meeting,
Night succeeds to even-song.
Storms may darken in the morning,
And eclipse the sun's bright dawning,
And the chilly gloom prolong.

But though clouds may screen and hide it

The sun shines for evermore;
Then bear grief in hope: abide it,
Knowing that it must give o'er:
And the darkness shall flee from us,
And the sun beam down upon us
Ever glowing more and more. (8-21, vol.III, p.95)

地上の喜びははかない——
地上の悲しみはとても長い——
出会いの後にはいつも別れが来る、
夕べの祈りの後には夜が来る。
嵐に朝は暗くなり、
太陽の明るい夜明けの光はおおい隠され、
冷たい暗闇が長くなる。

しかし雲がおおい隠しているけれども
太陽はいつも輝いている。
希望をもって悲しみに耐えなさい。
それが必ず終わることを知って、がまんしなさい。
そうすれば暗闇は消えて、
太陽の光は絶えずますます輝いて、
私たちに降り注ぐだろう。

どちらも表面的には神とか天国とかの言葉は使っておらず、内容はかなり近い。作者の悲しみや苦難を思いながら読んでいくと最後に急に楽天的になって終わるので、少し戸惑うが、しかしこれは、クリスティーナが深い信仰心を持った人であることを考えれば、理解できる。

これらの詩において、どうすれば救いが与えられることになっているか、に注目しよう。それがわりと簡単なことであるように見えるのが意外に感じられるかもしれない。「悲しみの中の希望」ではただ待っているだけのものであるし、「現在と将来」でも、耐えなさい、がまんしなさい、としか言っていない。必死に努力せよ、のように主張しないのである。だがこれは気楽な楽観主義とは違う。神を信じること、それが前提であり、神を信じる人にとっては、夜が明けて朝が来る、冬が終わって春が来る、それらはすべて神の摂理であり、人生の様々な浮き沈みもまたその一部である。だから、朝が来るのを誰も疑わないように、ただ信じて待ちなさい、と述べているのだ。つまり、

楽天的に見えていたのは、神にゆだねた人の心の安らかさなのである。

おわりに

ここではクリスティーナ・ロセッティの信仰に関わる詩を形式的に三つに分けて考察してきた。そこから感じられるのは、外見的にはそのような分類が成立しても、内容的には、どの詩にも共通して彼女の信仰心が表れているということである。詩のテーマとしての、自然に関する詩、恋愛に関する詩、というような区別とは違い、信仰は幼時からクリスティーナという人間の一部なのであり、広い意味で言えば、彼女の書く詩の全てが信仰の詩なのである。

注

注 1) クリスティーナ・ロセッティについての伝記的な事柄については Packer の本および Marsh の本を参考に行っている。

注 2) 本論におけるクリスティーナ・ロセッティの詩はすべて *The complete poems of Christina Rossetti. Volumes II, III* から引用している。引用した詩の末尾に行数、巻数、頁数を括弧内に示す。詩の日本語訳はすべて拙訳。

引用文献

- 1) Crump, R.W. (Ed.). *The complete poems of Christina Rossetti*, vol. II (1986), vol. III (1990). Louisiana State University Press.

参考文献

Marsh, J. (1994). *Christina Rossetti: a literary biography*. Jonathan Cape.

Packer, L.M. (1963). *Christina Rossetti*. University of California Press.

Rossetti, W.M. (1904). *The poetical works of Christina Georgina Rossetti*. Macmillan.

